

## 清浄に見ること

日本の現代の奇人癡姓外骨（元の姓は宮武）はその著『猥褻と科学』（一九二五年出版、非売品）の附録「自著穢褻書目解題」の中の「猥褻癡語辞彙」の項に注して云う。

「大正六年発行の政治雑誌『民本主義』は、第一号を出したとたんに禁止され、罰金に処せられ、且つ以後の各号もすべて発行禁止にすると表明された。わたしは実に如何ともするすべなく、そこでこの書の編纂に着手し、自序に、

“わたしの性格は過激と猥褻という二点に固執していると言え、いまわたしが企画している官僚政治討伐は、大正維新建設の民本主義の宣伝が妨害され窮迫を受けたからは、自然の成行きとして性の研究と神秘の漏洩に傾かざるを得ない。これが本書発行の理由であり、また即ちわが天職の發揮である。”云々。」

著者は明言しないけれども、彼の性情は明らかに時代に対する一種の反動であり、専制政治及び偽道学の教育に対する反動である。わたしは政治はわからないから、その方面には何も言うことがない。だが偽道学の教育への反抗という面では十二分に同感する。外骨氏の著書は、たとえば浮世絵、川柳および筆禍、賭博、私刑など風俗研究の各種に関して、いずれもとても興味を覚える。ただ最もわたしを佩服させるのは彼のいわゆる猥褻趣味、つまり礼教に対する反抗的態度である。ふつう猥褻な事物に対しては三種の態度がある。一つは芸術的に自然であること。二つは科学的に冷静であること。三つは道徳的に清浄であること。この三つはいずれも正しい。だが偽道学の社会ではわれわれ科学および芸術家でない凡人が取りうる態度は第三種でしかない、（実際には前二者を依拠とするのだが、）自分で清浄に見て、清浄でない眼を持つ人々に対しては白眼視し、嘲弄し、そして譴責するに至る。

わたしはヨーロッパの文芸復興時代の文人が最も好きである。彼らは非礼法主義を芸術の中に顕現させたからで、イタリアのボッカチオ(Boccaccio)とフランスのラブレー(Rabelais)を代表とすることができる。ボッカチオは芸術家であり、ラブレーは芸術家にして科学者を兼ねるが、同じくみな<sup>モラリスト</sup>道徳家で、『十日物語』には現世的空気が充満しており、『大渴王』(Pantagruel)の物語はさらに猛烈に政治宗教の聖殿を攻撃し、一方では理想のドロマ寺を建てた。ラブレーが“風化を<sup>やぶ</sup>傷る”ばかりか、“名教に罪を得る”嫌疑を受けた所以で、ボッカチオよりももっと危険であった。彼は狂信的な殉教者ではなく、冷酷な清教徒ともちがう。笑いながら、さわぎながら、猥褻の着物をかぶりながら、礼法の陣に出入し、結局は傷つくことがなかったのは、実彼の本領である。彼はかつて象徴的に言ったことがある。“わたしは生まれてより十分口が渴く目にあって来た、これ以上火で炙られる必要はない。”と。彼は又自分の主張に固執しようとして、あやうく茶甌に付されるところまで行ったとも言う。この点でわれわれをとても佩服させる、われわれが三十余度の禁止を食らった外骨氏に佩服するのと同じように。

中国はいま偽道学の空気が極めて濃厚であり、官僚と老人は言うまでもなく、青年までもがそうであり、たとえば心琴画会の展覧を批評して、“一幅の裸体画も絶無なのは、さらにその人品の高さが表れている”だと！中国のまだ呆けてない人々はどこにいるのだろう。なぜまだ“十字

架” を手にして反抗に起ちあがらないのか。われわれは芸術、科学、とりわけ道德の見地から、清浄に見ること〔浄観〕を提唱し、この偽道学の教育に、あやうく火炙りになるところまで反抗すべきである。 ( 民国十四年二月 )

※初出 : 1925 年 2 月 23 日『語絲』第 15 期